

人格形成とキリスト教

長 津 栄*

はじめに

昨年のことです。キリスト教学の教授から「キリスト教的人格とは何か、どのようにすればキリスト教的人格が形成できるのか」との質問に出会いました。それは、キリスト教主義大学に入学した学生に必須科目として授業し評価しつつキリスト教的人格を伝える困難を語り合っている時でした。会場からはそれに対する意見を述べる人はいませんでした。「そのような問いは解りきった答え、現状のやり方でよいのではないか」という空気と、「建学の精神としてのミッション（使命）と学問を教授する関係にしっくりしないものがある現状に関わりたくない」という空気が流れていたように思いました。その雰囲気違和感を感じ続けている時、今の私へと育ててくださった金城学院から「公開講演」の依頼を受けました。任に耐え得ないことを承知の上で、あの時の教授の問いに応えるつもりで、本日のお話を、表記の題でお受けしました。

1. 自己紹介を兼ねて50年の歩みを通して「今」考えている事

私は1963年に日本基督教団の教師として陶磁器を地場産業としている瀬

* 前日本基督教団高輪教会牧師・日本基督教団隠退教師

本稿は、2014年11月18日(火)、金城学院大学キリスト教文化研究所での講演をまとめたものである。

戸市にある教会の伝道師として赴任しました。日本基督教団において教師と総称されている職は、牧師、教務教師、伝道師、献身者、聖職者、説教者等と呼ばれています。 sacrament（聖礼典）ではありませんが使徒伝承を象徴する聖職按手を受けることによって「日本基督教団の教師」はキリストの代理の務めを担い遂行する者へと変えられたと信じています。

私はそのような多面的な姿勢を与えられた教師として瀬戸永泉教会と高輪教会の牧師、金城学院と頌栄女子学院の聖書科の講師、名古屋学院と明治学院の法人役員、そして瀬戸少年院と関東医療少年院の教誨師を務めさせていただきました。これらの職務を、愛知県から東京都へと転任する中でほとんど途切れることなく担ってきました。按手を受けた「牧師・講師・学校法人役員・教誨師」の任務を通して、キリスト教は現代日本において「どのような言葉を語り、いかにあるべきか（DoではなくBe）」を模索した50年間でした。

牧師としては聖書のメッセージを正しく語り生活すること。律法ではなく福音によって集められた共同体を形成するための奉仕者としてできる限りのことを心がけました。教誨師としては、瀬戸少年院の頃は自分の人格の正しさが大切であると思いながら犯罪少年と関わってきましたが、関東医療少年院の生徒と関わるうちに「私はこの少年を愛することができるか、この少年を愛する自分になりたい」と心がける自分へと変えられてきました。そして、高等学校の聖書科の講師として、授業にあたって「教育の課題10項目」を自分なりに毎年吟味して講壇に立ちました。その10項目のうちのいくつかを紹介しますと「②愛する能力と技術を身に着けること、⑤自分の良心を検証する尺度を持つこと、⑩安らかに死ぬる人になること」等々です。講義は祈ってから始めていましたが、採点評価は最後まで苦痛でした（私が中高生の頃、聖書科には試験がなく、当然成績評価もありませんでした）。

今日、キリスト教主義学校は大きな困難の中にあり、これからは更なる

困難の壁に突き当たると思われます。それは教会の弱体化に起因することは言うまでもないのですが、深刻なのは教会が語る「福音・信仰・神の国」などが教会や教師に都合の良いように語られ、検証が不十分のまま受け継がれている事であり、日本人の宗教意識に対して先進文化の衣をまとして「上から目線」で福音が語られてきたこと（本来福音はそのように語られ受け継がれるべきではないはず）のように思っています。

2. 人格と良心

人格形成を考えるにあたって、広辞苑の第6版をひもどくと「人格」を③で「道徳行為の主体としての個人。自律的意志を有し、自己決定的であるところの個人」と説明しています。すなわち人格は道徳行為と自律的意志や自己決定権と密接に関係していると考えられます。

2010年12月、少年矯正を考える有識者会議の提言の第1項目として「少年の人格の尊厳を守る適正な処遇の展開」が挙げられていますが、医療少年院に入院してくる少年は、外科ではなく精神科の少年が圧倒的に多くなりました。それも、AA（アルコール）、GA（ギャンブル）、NA（覚せい剤）、SA（セックス）などのアディクション（依存症）を病み、人格が破壊されている犯罪少年が20年前ごろから増えています。ネット依存は現代社会に蔓延し、さまざまな依存症という人格が病んでいる人が急増しているのが現状です。自律的意志の形成と道徳的行為の在り方が認めがたい依存症の人々が増加しています。そしてオウム事件や原理主義運動のように依存症的人格破壊の原因の一つとして、キリスト教をも含めた「宗教」が原因となっていると思っている人が多くいるように思います。

ローレンス・コールバーク[1927～1987]は「道徳性発達段階」を7段階に分けて次のようにしています。0段階＝自己欲求希求の水準。欲望がかなえられればそれでよいという在り方。これは赤子の在り方であっ

て人格的存在とは言えない。第1段階＝罰回避と柔順志向。親が叱るからやらないという在り方。第2段階＝互惠主義志向。良いことをしてあげれば後で良いことをしてもらえると考える在り方。ここまでは幼児期までに育成されるものであって道徳的であるということとはできないと考えられます。第3段階＝良い子志向。みんなが喜ぶことをしようとする在り方で、この段階からいわゆる人格が形成され始め、第4段階＝義務を果たし権威を尊重し社会秩序を維持しようとする広倫理的在り方。第5段階＝個人の権利を考慮しつつ、人間同士の合意に従う高倫理的在り方とし、3～6段階をもって広辞苑が説明するところの「自律的道德行為を持った人格」が形成された個人たり得るといえるでしょう。彼は更に第6段階として良心への志向を挙げています。これは普遍性と一貫性（時間空間的に普遍倫理的）を備え、正義と慈愛（キングジェームス訳のチャリティー。コリント一13章13節を参照）を備えた人格としています。この第6段階の普遍倫理的道徳性を彼は「仏陀、孔子、キリストの教えに見ることができる」と記します。彼の記述に従うなら、キリスト教の道徳行為は普遍性と一貫性を持った良心への志向を持つものであり、キリスト教の人格はそのように形成されなければならないと思います。しかし先ず、この「普遍性と一貫性を持った良心」が、キリスト教的であるのか否かが検証されなければならないと思います。言い換えるなら「私たちの良心は本当にキリスト教的であるのか。あるいはキリスト教的良心は普遍性と一貫性を持っているのか」ということを検証しなければならないと思います。

ここで「良心」について考えてみたいと思います。広辞苑では良心を「(conscience) 何が善であり悪であるかを知らせ、善を命じ悪をしりぞける個人の道徳意識」と説明しています。近年では、西欧の法制度に対して「日本人の物の考え方は性善説にのっとっているから」という言葉のもとに「日本は善人ばかりの社会であった」かのごとく言われ、良心の検証を試みようとはせず、善悪の判断を権力（お上）か大衆にゆだね「赤信号、

みんなで渡れば怖くない良心」の人格を形成しています。それゆえに広辞苑では「人格教育」を「心身の健全な発達とともに（中略）円満な人格の完成を目標とする教育」とあります。

良心の英語の語源はギリシャ語のシュン（共に）・エイドン（観察する）で、ラテン語を経由したものです。旧約聖書には良心にあたる概念はありません。新約聖書での名詞形は30回見られ、パウロはそのうちの14回を用いています。訳語としては意識、自覚、確信などとも訳されており、それゆえに「正しい、清い、明らかな」という形容詞がつけられてもいます。正しい確信としての良心、清い意識としての良心がキリスト教の求めるところの良心といえるのでしょうか。その時「何あるいは誰」と共に観察している「確信あるいは意識」なのかがキリスト教の良心の質を決め、キリスト教的人格を形成するのだと思います。

文部省が道徳を教科にしようとしています。「円満な人格を形成する」ことが目標とされているのだと思います。それは「正義や人権を問う」ことへの警鐘にもなりかねません。「村八分から始まって郷に入れば郷に従え、長いものには巻かれる」の良心を形成することになりかねません。加えて日本人は神仏の宗教行事に熱心にもかかわらず「無宗教」を主張する背景には、正義とか真実を追い求めるキリスト教に対する警戒心や、答えがないと思われる人生の根本的在り方を問うことへの恐怖心、更には自然崇拜としての神道ではない人格神宗教への警戒感があるのだと思います。宗教は役立つ限りにおいて利用すべきものであって、良心を問うのが宗教であるというなら「自分は無宗教という良心を持って生きる」と断言することができるのです。日本のヒューマニズム的良心は、権力と大衆が形成する良心といえるでしょう。そのような風土の中でキリスト教主義学校はどのような良心をどのように形成すれば良いのでしょうか。

3. 三位一体の教理と福音

主イエス・キリストによって啓示された神を信ずるキリスト教は、自然崇拜を背景とした神々を信ずる教えではありません。そして単なる「普遍的絶対的な唯一神」を信ずる教えでもありません。紀元325年に確立したニカヤ信条において記されているように「三つの人格をもちたもう一つの本質なる神を信ずる」宗教です。それは国家の在り方とも関係している告白であり信仰でもある信条を持つ宗教です。創造者にして裁き主なる正義の人格をもちたもう父なる神と、人となり人々の罪の贖い主となりたもう愛の人格をもちたもう子なる神を同時に信ずる宗教です。(聖霊については後記したく思います)。私はあえてペルソナを伝統的な人格という言葉避けて人格という言葉で表現してみました。キリスト教はユダヤ教やイスラム教と同じように正義や真実、絶対者である裁き主を信ずる宗教です。不正義や不信実に対して黙する自然を神として崇拜する宗教ではありません。キリスト教はそれに加えて、イエス・キリストにおいて示された神は、罪や悪を裁く正義の神であると共に、人間の罪をあがない救す愛の神を信ずる宗教です。正義の(父なる)神の人格と愛の(子なる)神の人格を信じ、その二つの人格を修得しようとする人格をキリスト教的人格と言い得るのではないかと思います。然し、私たちは弁証法が「正」と「反」を語り「合」に至るように、二つの人格の神を、自分の理性や思考、更には意志によって信ずる者となることはできません。それをなさしめるのが聖霊なる神の業によるのです。紀元589年のトレドの会議で聖霊を「父と子とより出て」と「子より」を加えたのはそのような意味があります(不適切な例かもしれませんが検事が父なる神、弁護士が子なる神、そして判事が聖霊として法廷が一体として形成しているように)。

しかし、今日のキリスト教は主イエスによって示された福音を福音とせず、「信じなければ救われない信仰」を説く宗教として全世界に伝道して

しまいました。信ずる者と信じない者の分断がなされ、福音ではなく改宗を迫るミッションがキリスト教の使命であるかのごとく伝播し続けているように思えます。主イエス・キリストの十字架において示された福音が「信ずる者も、信じない者も神は愛し、人の罪を赦し救っている。『それを信じなさい』という喜びのおとずれ」であるとするなら、人間が信ずるか否かで救いの可否が決まることはありえないのではないのでしょうか。キリスト教の語る神が、人間の在り方によって変わる方であるとするなら、先のコールバークの「道徳性発達段階」における、第2段階の互惠主義的存在の神でしかないことになります。「信仰によってのみ」というプロテスタントの合言葉が福音を福音としない合言葉になってしまったことは残念なことです。

私が瀬戸永泉教会の牧師のときの長老のご子息の鈴木直氏が翻訳した書物で、岩波書店から2011年に発売されたウルリッヒ・ベック著の「<私>だけの神」という書物があります。これはドイツ学術振興会の支援によって世界宗教出版社から出版され翻訳された書物です。訳者は原著の題を表記のように訳し、副題を「平和と暴力のはざまにある宗教」と訳していません。著者は正義と寛容のはざままで苦悶するキリスト教を歴史的に紹介しつつ、「真理の代わりに平和を? —世界リスク社会における宗教の未来—」という問いを投げかけつつ記した最終章を「真理を平和に置き換えること—世界リスク社会における近代化アクターとしての宗教—」と題して最終節を結んでいます。すなわち普遍的世界倫理のモデルとしての宗教の在り方として、正義とか真理ではなく平和とか寛容に置き換える宗教への提言がなされているのです。

この本を読んでいて私はキリスト教に対する自己懐疑と自己検証の必要性を痛感しました。三位一体の神を信ずることはそのような生き方へと変えられることであり、悔い改めて神の支配としての福音を信ずる（マルコ福音書1章15節参照）ことはそのようなことではないかと考えるに至った

のです。

特に私にとって強烈な文章はハンス・キュングの引用文から導き出された結論、「普遍的な神は征服する神，十字軍の神に他ならない。他者である『異邦人』は，ご親切にも彼ら自身の利益のために『救済』され，改心させられねばならないとされる。」という著者ベックの文章でした。このことばを導入したキュングは「世界倫理というものが存在しないだろうか」と問いかけながら「しかり，存在する。エスニックな単一性の強い日本は，三つの異なる宗教，すなわち神道，儒教，仏教が平和に共存でき……」と記し「……それは『アジア的』価値と『西洋的』価値の深い対立といったイメージをほとんど無効にってしまう」と記しています。キュングが「三つの異なる宗教」の中にキリスト教を入れないのはなぜなのだろうと，宗教教誨師として神主，僧侶の方々と親交を結んでいる牧師である私は疑問に思いました。キュングもベックも，明治以来キリスト教が批判し続けてきた日本人の宗教観を「世界倫理」への糸口であるかのごとく記していることに驚かされました。

4. 日本におけるキリスト教的人格の在り方

これまでで，人格形成は良心の形成に欠かすことができないことを確かめてきました。そしてキリスト教の良心は，自然崇拜によって形成されるものではなく，自己を絶対的正義とする唯一神教の神によって形成される良心だけであってはならないことも見てきました。主イエスによって示された三位一体の神によって形成される良心は，正義にして真理の裁き主であるとともに，人の罪をあがなうために人となり十字架によって「ご自身を信ずる者も信じない者も愛し救おうとしている神＝福音」を信ずることによって形成される良心です。それはベックが指摘しているように正義と寛容のはざまにある宗教の神を信ずることによって形成される良心です。

ベックは「世界倫理」の糸口として日本の宗教の在り方を指し示していますが、日本にあるキリスト教はそれをそのまま受け入れることはできません。かといってこれまでのキリスト教のように西欧の価値観と一体化して自己の正義を押し付けるものであってはならないと思います。たとえ、主イエスの生涯を通して示された「隣人を自分のように愛する」良心が世界倫理であると確信しても、それを、即ちキリスト教的な人格を、無宗教を良心としている「エスニックな単一性の強い日本社会」に押し付けるようなことがあってはならないと思います。そのような姿勢は福音的ではないからです。福音を他者に押し付けるとき、その瞬間それは福音ではなく律法になってしまい、和解をもたらすのではなく争いを生み出す暴力にすらなってしまうのです。

以上のようなことからキリスト教主義学校においてはアサーティブな教育が必要とされているといえるでしょう。キリスト教学としての学問を教授する時、聖書科という教科が授業される時、教師がそして学校法人が自己尊重というアサーティブな人格が形成されている必要があります。三位一体の信仰も、福音信仰も正しく信じられているならその人はアサーティブな人格の人になるに違いありません。もし正しく信じられていないなら、寛容を口にしていても暴力的な人格の人なのです。

ノーベル賞を受賞した動物行動学者のコンラート・ローレンツが「ソロモンの指輪」の最終章で、オオカミに教えられたこととして「敵に反対の頬を差し出すのは、もっと打たせるためではない。打たせないためにこそそうするのだ！」と記して、「いつかきつと相手の陣営を瞬時にして壊滅するような日がやってくる。そのときわれわれはどう行動するだろうか。ウサギのようにか、それともオオカミのようにか？ 人類の運命はこの問いへの答えによって決定される。さてわれわれは、いずれの道を選ぶであろうか」と結んでいます。

結び

キリスト教的人格の形成は破滅へと向かっているように見える世界の現状にあって焦眉の課題です。そのためにはキリスト者が福音的な人格を形成しなくてはなりません。洗礼と聖餐の sacrament に示されている信仰を与えられるよう聖霊の神に求め続けなければならないでしょう。

講演では加害者と被害者の和解を追及する「修復的司法」についてお話ししましたが、紙面の関係で省かせていただきます。キリスト教主義学校で「修復的司法」への取り組みがなされることを切に願っています。